



自衛官候補生入隊式



待望の若人たち

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、平成30年4月8日、秋田駐屯地において、「平成30年度自衛官候補生入隊式」を実施した。

本年度より新たに採用された制服に身を包み、初々しい姿の50名の自衛官候補生は、多数の来賓及び家族が見守る中、澆刺と国歌を斉唱した後、各区隊長からそれぞれ名前を呼ばれ、任命された。

続いて候補生を代表し麻生柗真候補生が入隊を申告し、須藤佳介候補生が「自衛官候補生として名誉と責任を自覚し、知識及び技能の修得に励む」と力強く宣誓した。

執行者の荒巻連隊長は式辞において、「我が国の平和と独立を守るという崇高な使命を持つ自衛官としての道を自ら志願したことに対し、大変うれしく、また心強く思う」と述べるとともに、「使命感を持つ」「自らを鍛え、仲間意識を持つ」の2点を要望し、「本教育の3ヶ月間において、自衛官として、立派な社会人として成長できるよう、しっかり修養してもらいたい」と激励した。

式典終了後、各区隊毎の記念撮影においては、カメラマンの後方に多数の家族が集まり、候補生の晴れ姿を写真に収めるとともに、約一週間振りに家族と対面し笑顔で談笑する姿が見られた。また、その後の記念会食においては、入隊式前日までの撮影された候補生達の生活の様子をスライドで紹介しつつ食事し、各テーブルにおいて候補生たちは、家族へ近況を伝えるなど、終始和やかな雰囲気が入隊式行事が行なわれた。





岩手山演習場春季統一整備



躍動する岩手山

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、平成30年5月7日から16日までの間、岩手山演習場において、平成30年度岩手山演習場春季統一整備を実施した。

連隊は、各種訓練施設を整備し演習場機能の維持・向上に寄与した。各部隊・各隊員が創意工夫をこらし、示された地域の目的に合わせて、より機能的な設備となるよう、額に汗を流しながら工事に励んだ。特に、昨年度より継続して行われている、戦闘射場の拡張及び迫撃砲射場の整備・拡張は各々が未来の自分たちの練成訓練を思い描き、期待を胸に膨らませながら作業にまい進した。

また、実際の訓練環境の整備を重視するに留まらず、隊務の総合一体化の絶好の機会と捉え、任務遂行能力向上及び隊員の心情把握の場として活用した。

早朝の零細時間には通信機器や救急法等の教育訓練を行い、夜間には偵察・行進等を演練する等、各部隊がそれぞれ趣向を凝らして実施した。

長期間にわたる整備活動を通じ、特に活躍が目覚ましかった本部管理中隊の小西洋樹士長は、師団長より褒賞状を受賞し、連隊においては、第1中隊の佐々木嘉貴 2曹以下7名が連隊長より褒賞状を受賞した。師団の統制で行われた写真教育及びフォトコンテストにおいては、基礎から応用技術まで様々行われて、秋田駐屯地広報室は「優秀賞」を受賞した。

編成解組式において荒巻1佐は、整備した演習場を使用することの大切さを問いかけ、今整備間の隊員の労をねぎらい、整備隊を解組した。





県民防災の日



県庁連絡幹部による孤軍奮闘記

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、5月21日及び22日の両日、秋田県が実施する「県民防災の日」に参加し、県災害対策本部における関係機関との連携の強化を図った。災害発生時に県庁連絡幹部として派遣される本部管理中隊長以下の隊員が参加した。

初日は模擬訓練が実施され、翌日の訓練当日にコントローラー（統裁部）となる隊員がプレイヤーとして参加し、全般の訓練状況を把握した。

二日目は、「県災害対策本部に連絡幹部が到着した」という状況から訓練に参加、発災から約3時間を前段として、その後、時間経過による夜間の状況を後段として連絡幹部を増員した体制により、各関係機関との連絡調整を実施した。

災害対策本部内は、自衛隊からの災害情報のみならず、各自治体、警察、消防、その他JR等の一般企業からも災害情報が入ってくるため情報の錯綜による混乱が生じており、調整も困難を極めている中、連絡幹部は、自衛隊から入ってくる災害情報を提供するとともに、部隊派遣に係る活動地域・活動内容、ヘリの離発着場等の各種調整を並行的に実施した。慌しい状況でも冷静に対応している連絡幹部の姿を見ると、これまでも指揮所訓練の成果が災害の場面でも発揮されていると改めて感じることができる。

秋田県で唯一の陸上自衛隊である第21普通科連隊が秋田県における災害発生時の最後の砦として、今後も防災訓練等を通じ、自治体及び地域住民との連携を図り、「ありがとう自衛隊」と頼られる部隊でありたい。





自衛官候補生修了式



早苗月の巣立ち

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、平成30年6月30日、秋田駐屯地において、「平成30年度自衛官候補生修了式」を実施した。

日差しが強く夏を感じせる暑さの中、46名の自衛官候補生は、来賓及び家族等が見守るなか威風堂々と入場し、国歌斉唱に引き続き教育修了申告、2等陸士任官申告をしたのち、力強く服務の宣誓を実施した。その後一人ひとりに特技課程教育の配置先部隊が伝達された。

荒巻連隊長は、「入隊からわずか3ヶ月の間に、見違えるほど凛々しくそして逞しく成長した諸官の姿に接し、連隊長として頼もしく思う。入隊式で要望した「使命感を持って」「自らを鍛え、仲間意識を持って」を同期の仲間達と多くのハードルを乗り越え具現したものと確信する。これからの教育で更に多くのことを学ぶと思うが、一つや二つの失敗に負けることなく努力を積み重ね成長してもらいたい」と式辞を述べた。

来賓祝辞、祝電披露に引き続き、佐々木 柊 自衛官候補生が、「私達46名は、新隊員として目標をしっかりと持ち、基本を大切にして同期の絆を益々深め、どんなにつらく苦しくても挫けることなく、第21普通科連隊の自衛官候補生課程教育修了隊員としての誇りと自覚を持ち、今後なお一層努力することを誓います」と答辞を述べた。





国内における米陸軍との実動訓練



東方の盾となり

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、8月30日～9月15日の間、王城寺原演習場で行われた「国内における米陸軍（第2-151歩兵大隊 大隊長 ベル中佐）との実動訓練（オリентシールド）」に参加した。

日米各部隊の戦術技量向上を主たる目的とし、米陸軍と綿密な調整を繰り返し臨んだ訓練は、日米両部隊による機能別訓練、並行して実施された各種課目の相互教育を実施し、お互いの練度向上に努めた。そして、本訓練の集大成とも言える日米共同による二夜三日の総合訓練に臨んだ。

日の出より早く静かに動き出した部隊は、橋梁の攻略に進む部隊及びヘリボンにより降着する部隊に分かれ、各々の任務を達成すべく部隊は躍進する。特にヘリボン部隊は濃密な迫撃砲による制圧の支援を受け、速やかに目的地域に展開。今まで積み重ねた成果を発揮するのはこの時ぞ、とばかりに目標奪取に邁進し、日米相互の共同訓練の成果を見せた。

過酷な訓練に身を置く中においても、任務や訓練を離れた時間は、互いに交流を深めるため、積極的にパーティー等のイベントに参加した。英語の得意不得意はあっても、それぞれポティーランゲージ等を駆使してコミュニケーションを図り、絆を深め合った。

2週間を超える長い時間を共にした両部隊の隊員達は、近づく別れのことを最後まで惜しみつつも、積み上げた成果と友情を確かなものとし、引き続き絆を深めていくことを固く誓った。





秋田県総合防災訓練



災害は人のみに在らず

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、9月2日、副連隊長濱田2佐以下、連隊約30名をもって、秋田県が実施する「秋田県総合防災訓練」に参加した。

連隊は、現地災害対策本部に現地連絡幹部を派遣し、対策本部と実動部隊の連携を密にしつつ、集結訓練から災害発生現場における人命救助活動、大館能代空港における広域医療搬送訓練、北鷹高校地域内における炊き出し訓練及びイオンタウン鷹巣における装備品展示に参加し、それぞれの活動地域において防災訓練を演練しつつ関係各機関との調整及び連携を図った。

特に人命救助活動訓練においては初めて「災害救助犬」と連携した捜索活動を実施した。災害救助犬の嗅覚による捜索は、迅速な発見からの救助行動を可能とするものであった。

この度の防災訓練等を通じて、災害発生を予期しつつ、また災害発生時には直ちに対応するため、地域との連携を密にした秋田の郷土部隊としての矜持を確かなものとした。





ヒストリーチャンネル取材



世界が注目する中で

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、平成30年9月5日、「国内における米陸軍（第2-151歩兵大隊長 ベル中佐）との実動訓練（オリエントシールド：以下OS訓練）」を実施中のところ、米国の衛星放送チャンネル「ヒストリーチャンネル」の取材を受けた。

この度のインタビューは、世界200カ国、約3億5千万人の視聴者を誇るヒストリーチャンネルより、日米共同の訓練について、日米それぞれの言葉を聴きたいと申し込まれたものである。

自衛隊及び米陸軍の各部隊長がそれぞれ質問を受け、荒巻連隊長は主要な訓練内容や本訓練の今年度の特色等について質問を受ける中、OS訓練というものは、本訓練のみによって完結するものでなく、日米間の各種任務や訓練等にリンクした訓練であることを語り、任務を共にする米陸軍の印象について「愚直に取り組む姿が諸所に見られる」と語り、信頼感をあらわにした。最後に「訓練を完遂し成功に導きたい」と本訓練への熱い思いを語った。





岩手山演習場秋季統一整備



山を刈り、丘を駆る

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、平成30年10月4日から10日までの間、岩手山演習場において、平成30年度岩手山演習場秋季統一整備を実施した。

連隊は、演習場機能の維持・向上を目的に各種訓練施設を整備した。特筆すべきは「隊務の総合一体化」の施策として、整備を部隊訓練の一環とするとともに、各種競技会等の行事や訓練非常呼集等の訓練が随時実施されたことである。

訓練地域や幹線道路の整備・拡張、機動路新設整備等の整備任務を確実に遂行する中、7日に「炊事競技会」8日夜に「らっば競技会」が実施され、10日に実施予定であった「車両競技会」は連隊の整備が早期に終了したため、11日駐屯地で実施された。

7日夜20時頃、宿営地域に訓練非常呼集の放送が流れ、状況を開始。当日、各部隊の初動要員達は速やかに準備を済ませると、連隊本部天幕の前に集結、いかなる状況にも即応しうる練度を証明し、第3科長を感嘆せしめた。

7日間に及んだ統一整備は、各部隊・各隊員の迅速確実な整備によって、演習場機能が十全に保たれた。





東北ブロックDMAT参集訓練



DMAT東北ブロック参集訓練in秋田

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、10月6日（土）秋田県が主催する東北ブロックDMAT参集訓練に参加した。

災害派遣時における災害医療対策本部に対する連絡員派遣及び患者搬送訓練により、DMAT（災害派遣医療チーム）との連携を強化するとともに、災害対応能力の向上を図ることを目的に、本部管理中隊の衛生小隊長福田2尉を長に約20名が参加した。

本訓練は、秋田県庁、秋田空港、秋田大学病院、由利組合総合病院と県内広域での訓練となり、部隊は秋田大学病院の男鹿前線型SCU（広域搬送拠点臨時医療施設）訓練に参加した。

秋田沖地震に伴い、10m大の津波が押し寄せ甚大な被害が発生し、秋田県は新潟県及び東北6県のDMATに派遣要請、自衛隊に災害派遣要請したという想定で訓練を開始。男鹿前線型SCU訓練では、自衛隊と日赤赤十字社により医療テント（一般用天幕）を展開し、患者の受け入れ訓練を実施した。また、自衛隊の救急車による男鹿前線型SCUから秋田大学医学部付属病院及び秋田空港SCUへの患者搬送を実施した。

男鹿前線型SCU訓練を指揮した衛生小隊長の永井大介2曹は、「本訓練に参加し、災害派遣時の医療現場における各医療機関の密接な連携が重要と感じた。今後も訓練機会があれば積極的に参加したい。」と話した。





連隊炊事競技会



華麗なる料理人たち

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、平成30年10月7日、岩手山演習場において連隊炊事競技会を実施すると共に、師団カレーコンテストに参加した。平成30年度岩手山演習場秋季統一整備における「隊務の総合一体化」の一つとして計画され、各中隊の期待を一身に受けた選手達が我こそはと腕を競った。本競技会は師団カレーコンテストへの選抜も兼ねており、選手達は味の濃淡や米粒一つのやわらかさにまでこだわり、自慢のカレーを作り上げた。盛り付け部門及び味付け部門において採点され、連隊長を初め各科長及び部隊長等が審査委員として吟味し、各部門で高い点数を記録した2中隊が優勝した。その後、各科目の点数を参考に、各中隊から選抜メンバーが編成され、師団カレーコンテストに望んだ。主菜の2中隊と炊飯の4中隊が大いに実力を発揮し、師団第1位の成績を修め、炊事長の第2中隊 武田2曹には師団長メダルが、第4中隊の佐藤1士には連隊長メダルがそれぞれ授与された。16日の連隊朝礼において、荒巻連隊長より、受賞者達に賞状とメダルが授与され、「（状況下における）美味しい食事は、心身ともにその日活動するための活力となる」と所見を述べ、炊事能力の重要性を説くとともに、本競技会において活躍した選手達を労った。





連隊らっぱ競技会



宵間に奏でる

第21普通科連隊（連隊長 荒巻 1佐）は、平成30年10月8日岩手山演習場において、らっぱ競技会を実施した。

平成30年度岩手山演習場秋季統一整備における「隊務の総合一体化」の一つとして、個人戦及び団体戦が設けられ、部隊長指定選手と抽選で選出された選手が各々優勝に向け練成を重ね本番に臨んだ。

各中隊・各選手は零細な時間を活用して、本番へ向けた練習を重ねた。時に朝礼時結節を設けて選手に吹奏させる中隊、整備間、休憩の開始と終了を選手に吹奏させる中隊等々、様々な工夫を凝らし、それぞれの部隊が選手をバックアップした。選手たちは整備が終わると銘々に練習を重ね、岩手山の夜に信号らっぱの音色が響き渡った。

8日17時、荒巻連隊長と綿引最先任上級曹長に加え、第9特科連隊より2名の審査員を加えて本番が始まった。各部隊の仲間たちが、今か今かと待ちわびるなか、個人戦から始まり、課題曲「君が代」と本番直前に決まった指定曲「送迎の譜」をそれぞれ演奏した。32名もの選手が立て続けに演奏すると、同じメロディーであっても音色や音の強弱等の個性が現れ、普段とは違った信号らっぱに審査員もギャラリーも吃驚した面持ちであった。

団体戦は指揮者とも名の奏者による「巡関の譜」が演奏され、指揮者のテクニックや演奏時の吹き分け等、中隊毎に個性が光った。

個人戦は連隊らっぱ教育隊の教官も務める第1中隊 小松 1曹が圧巻の吹奏を見せつけ優勝。団体戦においてもその小松 1曹の指揮に率いられ、合奏という面で僅かにリードした第1中隊が優勝を飾り2冠を果たした。

夜遅くまで続いた競技会は、熱戦を繰り広げた選手達に対し、らっぱの音色に並ぶほどの熱い声援が送られ幕を閉じた。





連隊車両競技会



鋼鉄の輪舞曲

第21普通科連隊（連隊長 荒巻 1佐）は、平成30年10月11日、秋田駐屯地において車両競技会を実施した。

平成30年度岩手山演習場秋季統一整備における「隊務の総合一体化」の一つとして計画された。当初演習場で実施予定であったが、連隊の作業進捗が順調で、部隊が前倒して帰隊できたため、翌日駐屯地での実施となった。

当初4日に各中隊15名程度で学科試験（仮免問題）が実施され、ドライバーとしての知識を競い合い、11日の午前中に秋田駐屯地において、若手隊員を対象に選抜された各中隊3名のドライバー達が、指定されたコースで鏝を削った。

特設されたコースはスラロームに始まり、狭隘道路等の難所を設け、安全確実かつ迅速にこなすことが求められた。

特に最終科目であるペットボトルが並べられた狭路は、僅かな接触でもペットボトルが転倒するため、各ドライバーは逸る気持ちを抑えながら慎重にハンドルを操作していた。個人戦では圧倒的な速度と正確さを誇った第3中隊 高橋 3曹が優勝、中隊別では、3人平均して高得点出した重迫撃砲中隊が優勝した。

各中隊長や諸先輩方が見守る中、一様に緊張した面持ちであったが、皆集中力を切らすことなく、圧巻の運転をみせ、競技会は無事終了した。





秋田県（陸・海・空）自衛隊殉職隊員追悼式



青天に捧ぐ想い

秋田駐屯地（駐屯地司令 荒巻1佐）は、10月13日、駐屯地慰霊碑前において「平成30年度秋田県（陸・海・空）自衛隊殉職隊員追悼式」を執り行った。

晴天に恵まれることで有名な秋田駐屯地の追悼式は、本年も澄み渡る秋空に恵まれ、十九柱の御霊と参列した者たちの心を安んじる天候となった。式には、ご遺族をはじめ、秋田県、秋田市、各関係機関及び自衛隊協力団体等からの来賓のほか、秋田県所在部隊長、駐屯各部隊長及び隊員が参列した。

荒巻司令は、「殉職された皆様の尊い志を受け継ぎ、貴重な教訓を活かし、国家防衛という崇高な使命を果たすべく、精強な自衛隊の育成に邁進し、任務完遂に努めますことをお誓い申し上げます」と追悼の辞を述べた。引き続き、来賓を代表し、秋田県知事代理神部秀行総務部長及び秋田県防衛協会中泉松之助会長から追悼の言葉、秋田吟詠会鈴木岳順会長の追悼和歌朗詠に引き続き、秋田駐屯地音楽隊による「慰安する」の吹奏での献花、儀仗隊（本部管理中隊福2尉以下13名）による拝礼・吊銃をもって、十九柱の御霊をお慰めし、追悼式を終了した。





秋田駐屯地創立66周年記念行事



将軍野にて齢を刻む

秋田駐屯地（駐屯地司令 荒巻1佐）は、10月20日、秋田駐屯地創立66周年記念行事を実施した。

澄み渡る秋晴れの中、多くの来賓と約7千名の来場者に迎えられ、観閲式及び観閲行進が挙行された。荒巻司令は「私は「活力ある駐屯地」そして「地域と共に」たらんことを隊員に要望しています。（隊員と共に）それぞれの大切な家族・友人、そして日頃から我々を支えて下さる地域の皆様や協力団体、諸先輩の顔を思い起こし、士気旺盛にして強固な団結、そして厳正な規律を保持した部隊を目指します」と式辞を述べ、続いて、佐竹秋田県知事をはじめ、秋田県選出国會議員の方々が、駐屯地に対する信頼と強い期待を込めたご祝辞を述べられた。

観閲行進においては、軽快な第9音楽隊の演奏に併せ、威風堂々とした徒歩部隊の行進に引き続き、軽装甲機動車、戦車等の車両部隊が迫力ある行進を披露した。

その後、バイクドリルでは過去最多の12名編成による演技を披露し、訓練展示においては駐屯地初の女性自衛官によるリペリングを実施した他、戦車・車両試乗、装備品展示、ミニSL、地域活動発表、カレーコーナー、音楽演奏など様々なイベントコーナーも大盛況を迎えた。

今回特に話題を呼んだのは、荒巻司令の依頼により実現した、航空自衛隊松島基地第4航空団がクラブ活動の一環で実施している「フルーインパルスJr.」である。物珍しさも相まって多くの観客を集めた他、県外地域においても話題となった。

大成功を収めた駐屯地記念日は、地域の方々との信頼関係をより育み、自衛隊への深いご理解を頂き、老若男女多くの笑顔に包まれて幕を閉じた。





女性隊員の活躍



記念日

陸上自衛隊秋田駐屯地（駐屯地司令 荒巻1佐）は、10月20日（土）創立66周年記念行事を催し、約7千名が来場、大盛況に幕を閉じた。

本行事における訓練展示において、女性隊員4名が参加。第21普通科連隊本部管理中隊衛生小隊の齋藤沙耶香3曹、森川愛彩1士がヘリからのリペリングを披露、同重迫撃砲中隊の齋藤望士長、増田史帆2士が重機関銃要員として参加した。リペリングにおいては、これまで駐屯地としてレンジャー隊員が実施していたが、今回初めて女性隊員が挑戦。レンジャー塔、実機と訓練を積み重ね、晴れて記念行事当日を迎えた。

秋晴れのもとに訓練展示が開始され、大勢の観衆が見守る中、女性隊員2名を乗せたヘリは駐屯地グラウンド上空に到達。緊張が張り詰める中でホバリングしたヘリのドアが開かれた。「位置に付け」の合図でスキッドに足が掛けられ、「降下用意、降下」とともに長く伸びたロープを滑り降りた。

参加した森川1士は、「初めての体験で緊張したが訓練を積み重ねるうちに他の男性隊員に負けていないと感じた。女性隊員でもできる。」と力強く話した。

陸上自衛隊において女性隊員の活躍が期待される中、秋田駐屯地においても新たな一歩を踏み出した記念日となった。





ブルーインパルス Jr.



ブルーインパルス Jr. 飛来

陸上自衛隊秋田駐屯地（駐屯地司令 荒巻 1佐）は、10月20日（土）創立66周年記念行事を催し、約7千名が来場、大盛況に幕を閉じた。

その秋田駐屯地記念行事に初参加の「ブルーインパルス Jr.」が飛来した。ホンダ ジャイロキャノピーが本体であるブルーインパルス Jr. は、航空自衛隊松島基地第4航空団のクラブ活動の一環で実施しているもので、秋田駐屯地司令の依頼により本演技披露が実現した。

松島駐屯地第4航空団から佐藤 征樹 1等空尉を長とする8名が参加した。前日19日松島基地で青い機体を積載した8名は、秋田駐屯地までのみちのり、約250kmを移動し、到着するやいなや夕暮れの中で現地での練習を実施した。

記念行事当日、スカイフルーの空の下で幕を開けた。多くの観客が見守る中、4名4機による演技が開始された。パロティーも取り入れられた演技に観客は魅了され、拍手と笑いで終始笑顔に溢れた。

山口青邨の句「旗雲と 飛行機雲と 秋の空」のごとく、ブルーインパルス Jr. は、秋田駐屯地に美しい雲を残し、松島基地へと飛び立った。





第5次野営



一発にかける思い

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、10月30日から11月2日までの間、岩手山演習場において射撃野営及び各種射撃等競技会を実施した。

2回の野営に分けて実施される各種射撃等競技会は本演習後半に「施設競技会（70式地雷原爆破装置投射による適切な通過口の確保）」「小銃擲弾射撃競技会」「110mm携帯対戦車弾射撃競技会」の三つが実施された。

時折小雨降る寒さの中、30日と31日は、各種射撃練成が行われ、各部隊万全の態勢を整えた。特に本野営間に行われる3種目の練成については、細かな射撃位置や射撃順等、各中隊の計画において自由の利く部分は、中隊それぞれの創意工夫が見られ、参加者の優勝にかける熱い思いが溢れていた。また、狙撃銃と12.7mm重機関銃の練成射撃も併せて実施された。

1日は施設競技会を実施。各中隊が正確な投射を見せるも、基本的行動及び基礎動作が最も徹底された第4中隊が僅かな点差をものにし優勝。

2日、小銃擲弾射撃競技会は 正確性と速度において一步抜きん出た、第3中隊が優勝、110mm携帯対戦車弾射撃競技会は各中隊が背嚢等を利用したなか、速度と正確性、そして適切な目標配分と行った第2中隊が優勝した。

6日の表彰式において統裁官の荒巻連隊長は「今回の結果は、あくまで現在の状況であり、この後が大事。（それぞれの結果を）究明・改善することで、その積み重ねが次の射撃へ繋がる。各中隊成績に囚われず練度向上して欲しい」と所見を述べ、各隊員を労うと共に、これからの連隊の発展に思いを馳せ、幕を閉じた。





連隊施設競技会



道を開く者たち

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、11月1日、岩手山演習場において施設競技会（以下：競技会）を実施した。

この度の施設競技会は70式地雷原爆破装置の投射による、通過口の開設及び基本的行動の基礎動作を課題とし各中隊がしのぎを削った。

本競技会は、設置開始から発射までの間約30にも及ぶ安全点検を確実に行った上、設置までの時間、爆破位置の方向・縦深の精度を競い合った。

まず初めに本部管理中隊の施設作業小隊が展示を兼ねて実施し、その後各中隊が続いた。第1中隊と第3中隊は誤差ゼロの投射を実現し審判を驚かせるも、優勝に輝いたのは、精度において僅かに両中隊に及ばなかったものの、基本基礎動作の確行等、減点を限りなくゼロに押さえ迅速な投射を行った第4中隊であった。

各中隊過去の投射訓練を確実に積み上げ、競技会に向け練成を繰り返した努力が形に表れていた。

表彰式において統裁官の荒巻連隊長は、「（各中隊ともに）多くの教訓を得ることが出来たはず。基礎動作や時間の短縮等の練度や投射精度はまだまだ改善すべき余地がある、この結果に満足することなく、練成を重ねて欲しい」と述べ、本競技会に向け練成を繰り返した努力を労うと共に、各部隊・各隊員の更なる練度向上を期待し、幕を閉じた。





連隊110mm携帯対戦車弾射撃競技会



戦車を屠る

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、11月2日、岩手山演習場において110mm携帯対戦車弾射撃競技会（以下：競技会）を実施した。

前日までの小雨が嘘のように晴れ渡った寒空の中、競技会は、各中隊から選抜されたLAM分隊による、激動に引き続く110mm携帯対戦車弾（以下：LAM）の射撃を実施した。

LAMを安定して射撃するには地形や土のう等を利用し安定した姿勢を作り上げることが重要になる。その為各中隊はそれぞれ工夫を凝らして本番に臨んだ。土嚢を手搬送して射座での速度を追求する部隊もあれば、背のう等を利用し激動間の速度を追及する部隊もあり、各中隊が本番に向けどれほど頭を悩ませたかが伺えた。

射撃時においても、いかに迅速確実な射撃を実現するか各中隊の作戦が現れ、号令をかける際の速度と正確さを求め、分隊長の位置を試行錯誤したり、射撃順を工夫したりと、全体的に各隊員の技量もさることながら、分隊の機能をより研ぎ澄ませた射撃となった。

優勝は速度と正確性、そして適切な目標配分と行った第2中隊が掴んだ。

表彰式において統裁官の荒巻連隊長は「共通して背のうの活用及び目標配分等、射撃統制に工夫が見られた。（各隊員の実力であれば）もっと突き詰めて毒度、精度の向上が可能である。引き続き練成を重ねよ」と競技会へ向けた努力を労うと共に、連隊の更なる発展を期待し、幕を閉じた。





連隊小銃擲弾射撃競技会



放物線の先

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、11月2日、岩手山演習場において小銃擲弾射撃競技会（以下：競技会）を実施した。

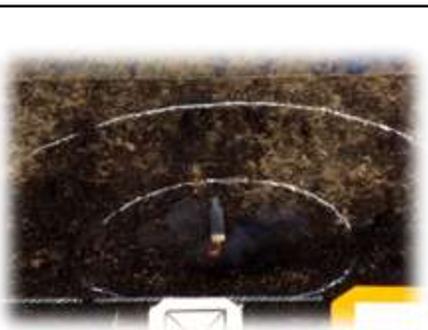
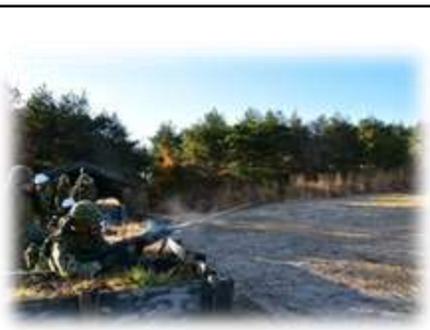
擲弾（てきだん）とは比較的近距离の人や物に対して攻撃するもので、手榴弾などもこれに含まれる。小銃擲弾（以下：擲弾）とは小銃を用いて発射する擲弾で、この度、中隊対抗による競技会が催された。

涼しさが寒さに移り行く中、各中隊から選抜された擲弾分隊による、激動に引き続く擲弾射撃の腕を競った。

激動後の息が上がる中、各分隊長は声を張り上げて分隊を統制し、射撃の位置・時期を的確に指示していた。同じ小銃と言えども、擲弾装着により銃のバランスも反動も普段と勝手が違う。比較的体勢の近い立射ちの他、地面に銃を委託して行う高射角による膝射ちは難度を極めた。

優勝は正確性と速度において一步抜きん出た第3中隊が栄誉をつかんだ。分隊長の言葉を的確に判断し実行する分隊の様子には競技会へ向けた並々ならめ努力のあとが垣間見えた。第1中隊は惜しくも二位となったが、最も正確な射撃を見せた2名を輩出した。それは佐々木翔平3曹と細井拓也3曹である。高射角による膝射ちにおいて、立て続きに射撃した二人は、的に見事命中させ、射座の勤務員たちから思わず歓声が出てしまうほどの美しい放物線を描いた。

表彰式において統裁官の荒巻連隊長は「各中隊、射撃方法や統制要領に様々な創意工夫が見られた。さらに、各分隊員は射距離判定及び観測能力の向上を困ってもらいたい」と述べ、各中隊のこれまでの成長を労い、これからの成長に期待を馳せ幕を閉じた。





みちのくALERT2018



闇夜に響くALERT

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、11月9日～11日の間、秋田県内及び仙台駐屯地で行われた「みちのくALERT2018」に参加した。

東北6県が同一想定、同一の時間軸で一連の状況のもと、自治体及び関係機関と連携した災害対応能力の向上を主たる目的とした訓練は、連隊計画訓練と大館市が計画した物資輸送訓練及び燃料連携訓練が行われた。

連隊は9日0430三陸沖においてマグニチュード8を越える巨大地震が発災したという想定のもと、初動対処部隊の派遣訓練、各中隊の災害派遣準備訓練、全県の場外離発着場の偵察など災害発生時に必要な情報の収集を行った。場外離発着場の偵察では大仙市立中仙中学校において派遣部隊が活動可能か学校職員の案内を受け校内及び屋外の施設調査に当たった。

11日は大館能代空港を物資拠点とし陸路及び空路を第四中隊の大型車両、第6飛行隊のUH-1により輸送を行った。途中、陸路では釈迦内PAにおいて第9後方支援連隊が開設した給油所において燃料給油を実施した。

本訓練を通じ、災害発生時における自衛隊と各関係機関との連携要領について演練するとともに、各部隊の練度向上を図ることができた。





東北管区広域緊急援助隊合同訓練



垣根を越えたチームワーク

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）から第1中隊（中隊長 小島3佐以下12名）が、11月12日、秋田市雄物川右岸秋田大橋上流河川敷においてを秋田県警が主催する東北管区広域緊急援助隊合同訓練に参加した。

広域緊急援助隊は阪神・淡路大震災を機に設置され、合同訓練は東北各県において持ち回りで実施する。今年は秋田県において東北各県の警察、秋田市消防、DMAT（災害派遣医療チーム）等の防災関係機関等と連携をとりながら実施された。

自衛隊は警察と協同連携し合同調整所訓練と救出救助訓練に参加し、小型ドーザにより土砂を取り除き、警察の人員で救出するチームと、両組織が人力で車両から人員を救出するチームに分かれて行った。

特に人命救助チームは、警察及び自衛隊がそれぞれ声を掛け合い、互いに注意喚起しながら迅速に取り組んだ。車両の後部ドアを破壊し進入した隊員達は、被災者に声掛けを続けながら丁寧に搬送し、首を負傷したと思われる被災者に対し警察の助力を得てネックカラー（頸椎固定具）を装着し、安全確実かつ迅速な救助活動を実践した。

各関係機関が有機的に結合し、災害に全力を投じた訓練は、それぞれの練度向上と連携を高めると共に、地域の方々延いては全国の皆さんの信頼に応えうる気概と能力を示し、万全の準備態勢を確立して終了した。





一般幹部候補生普通科隊付教育



煌くひと時

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、11月15日～12月3日までの間、平成30年度一般幹部候補生普通科隊付教育を実施した。

本教育は、幹部候補生達に普通科連隊における陸曹及び陸士の勤務等を体験させ、普通科部隊の実情を明らかにし、部隊指揮の基盤を形成して幹部としての地位と責任を自覚させることを目的として毎年この時期に行われ、連隊長や中隊長達からの精神教育や営内生活等を通じて部隊の服務指導の実態や、特別勤務、各種射撃、基礎的戦闘訓練等を実施し、普通科部隊の実状の一端をその身をもって学んでいくものである。

数多くの課目がある中、本年の教育の最大の特徴は、連隊武装走競技への参加であろう。各中隊がその威信を賭けて競う競技会が本教育期間に実施されたため、幹部候補生たちも参加と相成った。小雨降る中、各中隊の声援を受けながら、我こそはと足を前に進め、中隊の隊員と共に全員が快走を見せた。

11月29日の臨時駐屯地朝礼において、代表して出雲幹候は「陸曹及び陸士と時間を共にし、多くのことを学ばせてもらいました。ここでの経験を糧に、立派な幹部自衛官になります」と所見と感謝を述べ、幹部任官への夢と秋田での思い出に胸を馳せ、幹部候補生学校へと帰っていった。





連隊武装走競技会



野を駆ける戦士

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、11月19日～20日の間、新屋演習場において平成30年度連隊武装走競技会を実施した。

本競技会は、断郊走及び6kmと3km（フレートを装着した防弾チョッキ着衣）の個人走3種目争われた。

コロコロと天気に変化する中、選手達のスタートに華を添えるかの如く、出走の度に晴れ間に恵まれた本競技会は、己の限界を超えんとする隊員達の熱気に終始包まれた。競技会場は起伏が激しく、時に坂道の向こうを見通すことも叶わないほどの過酷なコースに選手達は歯を食いしばりながら挑んだ。

各個人走は二日間に渡って実施された。個人戦という孤独な戦いを強いられる中、どんなに苦しく、どんなに激しいコースでも決して妥協することなく、己と向かい合った本種目は、皆滝の汗を流して完走した。

断郊走は二日目に実施され、個人走と打って変わってチームワークによる熱戦が生まれた。走る姿で仲間を先導したり、その仲間のスピードに追いつこうと心を震わせたりと、皆仲間のためにと実力以上の結果を出した。ゴール目前では自らも苦しい中、大声で仲間を鼓舞する選手もあり、選手のみならず、応援者や勤務員たちの心も振るわせた。

熱戦の末、個人走は陸士の部で優勝した第3中隊 佐藤智一1士が連隊最速タイムを記録し、中隊対抗では断郊走と個人6km走で種目別1位を飾った本部管理中隊が総合優勝を果たした。





連隊87ATM射撃競技会



ミサイルに心重ねて

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、11月21日に秋田駐屯地、26日に王城寺原演習場において87ATM射撃競技会（以下：競技会）を実施した。

各中隊は毎年射撃を実施しているものの前回の同競技会の開催は平成13年度であり17年振りの競技会開催となった。

競技会は21日縮尺誘導訓練装置を使用した模擬実射の命中精度を競い、26日に陣地進入から射撃準備完了までの速度及び基礎動作と実射における命中精度で競技を行った。

21日の模擬実射においては各中隊から選抜された分隊長が、平行移動するの的に対し6回、斜行するの的に4回射撃を行った。射撃を行なう度に静まりかえった訓練場室内には訓練装置から「命中」の音声流れ、練度の高さを示した。

26日の実弾射撃は命令下達～陣地占領～射撃までの間の戦闘基礎動作をチェックするとともに速度を評価し、その後実射での命中精度を競った。

実射では分隊員同士の息の合った連携動作と分隊長の指揮により各中隊の分隊は次々と標的に命中させた。

競技会は第3中隊が他の中隊を抑え優勝した。表彰式で荒巻1佐は「練成を積み重ね、その成果を着実に積み上げてもらいたい」と述べ、本競技会を締めくくった。





秋田駐屯地綱引き大会



君の縄。

秋田駐屯地業務隊（業務隊長 坂本2佐）は、12月5日、駐屯地厚生活動の一環として、秋田駐屯地綱引き大会を実施した。

寒波迫り来る師走の体育館に歓声が響き渡る。駐屯地各部隊がそれぞれチームを編成し、1試合3本勝負で競い合い、10チームによるトーナメント戦が行われた。

決勝戦では統制された動きと技術で戦う第2中隊と圧倒的な体格とパワーで戦う重迫撃砲中隊の好カードとなった。一進一退の攻防は、大会唯一の3本目までもつれ込む激戦となり、僅かな差を制し第2中隊が優勝した。

各中隊が枠を超えて声援を送った名チームがあった。それは、駐屯地司令 荒巻1佐率いる21連隊本部チームである。秋田駐屯地の歴史を紐解いても稀に見る、過去最強のヘビー級連隊本部チームは、幾多のチームを押しよせ躍進し、勝ち上がるたびに歓声を増やして行った。惜しくも準決勝で敗れたものの、駐屯地の融和団結の中心となった。

各チームが、年の差も階級の差も越えて、活躍した本大会は、駐屯地全隊員の結束を確かなものとし、笑顔のままに終了した。





第7次野営



雪上の熱気

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、12月11日～17日の間、岩手山演習場において、第7次野営を実施した。

連日氷点下が続く岩手演習場において雪の演習場を人間と火気の熱気が覆い尽くす。

本野営は、爆破訓練及び各種射撃訓練を実施し、射撃等の練度向上を図るとともに、総合戦闘射撃競技会及びその練成を通じて、特科部隊及び戦車部隊との調整・協同要領を向上させることを目的に実施された。

野営前半は各種射撃訓練や爆破訓練を実施し、競技会へ向けた実践的な練成を重ねたりと、各中隊様々な目標を立てて、練度向上に努めた。特に今年度の普通科職種統一訓練において射撃競技会に参加する重迫撃砲中隊は、より一層気概が強く、東北方面隊で一番の部隊になることを目標に一致団結して練成を重ねていた。

15日より2日間の日程で実施された連隊総合戦闘射撃競技会は、4コ普通科中隊が、特科中隊に支援された、戦車1コ小隊を含む増強普通科中隊として一連の状況下で競い合った。最後まで接戦にもつれた本競技会は、僅差をものにした第4中隊が優勝した。





連隊総合戦闘射撃競技会



雪原を泳ぐが如く

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、12月15日～16日の間、岩手山演習場において、総合戦闘射撃競技会を実施した。

本競技会は、連隊所属の4コ普通科中隊が、特科中隊に支援された、戦車1コ小隊を含む増強普通科中隊として一連の状況下で競い合った。

各中隊は、集結地から数線の統制線を経て目標を奪取し逆襲対処するまでの一連の状況の中で、小銃、機関銃及び狙撃銃等を用いて、杭により固定された「固定的」、機械制御によって不意に現出する「ホップアップ的」をそれぞれ狙って点数を競った。

白く雪化粧された岩手山は近づくほどに寒さを増し、足に纏わり芯を冷やす。他員たちは身を包む寒さを吹き飛ばすように雪原を駆けた。その姿はまるで水面を泳ぐ鯨のように、低く速くそして鋭かった。

各中隊は射撃の点数を競う競技会と言えども、特科中隊の155mmりゅう弾砲による前進及び突撃への支援射撃、配属された戦車小隊の敵戦車等に対する射撃と有機的に連動した部隊行動を徹底し、終始基本基礎動作を実践しながら部隊の力を発揮した。

優勝は全火器において平均的に高得点を記録し、他中隊を僅かにリードした第4中隊が接戦を制し栄光を掴んだ。

18日の表彰式において統制官の荒巻連隊長は「零細な時間を活用してよく練成を重ねた。次年度以降の師団射撃競技会の為にも、引き続き演練してほしい」と本競技会へ望んだ各中隊の労をねぎらうとともに、これからの更なる躍進を願い訓示を述べた。

二日間に渡った競技会は、隊員たちに更なる向上心と団結力を醸成し、幕を閉じた。





連隊銃剣道競技会



一閃の如き突き

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、12月18日秋田県立武道館において連隊銃剣道競技会（以下：競技会）を実施した。

連隊は競技会により近接戦闘能力を向上させるとともに、部隊の士気の高揚及び団結の強化を図っている。

競技は各中隊29名（補欠含め38名）の中隊対抗戦と女性自衛官個人戦が行われた。

中隊対抗戦は総当たり方式で、試合は陸士、准・曹、幹部の順序及び組合せで、女性自衛官個人戦はトーナメント方式で試合は2分1本勝負により実施し、勝負が決定しない場合は「判定」により行われ、代表選手は一戦一戦に死力を尽くし勝利を追求した。

また、応援団も趣向をこらした応援により選手たちを後押しするとともに、選手が鋭い突きを繰り出すたびに応援席からは歓声上がり、各中隊は一丸となり勝利を目指した。

競技の結果は中隊対抗戦では第3中隊が優勝、女性自衛官個人戦では重迫撃砲中隊の齊藤嘉穂1士が優勝の栄冠を手にした。





幹部候補生着任行事



新しい出会いの来訪

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、1月21日、秋田駐屯地において、平成31年度幹部候補生着任行事を実施した。

本行事は、第3中隊に着隊した、佐々木佳月 幹部候補生（以下：佐々木官幹候）の自覚を促すとともに部隊としての期待を込め行われた。

21日朝、駐屯地に地鳴りの様な雄叫びが「ウォーウォー」と響き渡った。それは、ゴミ捨てから部屋に戻った佐々木幹候へ行動命令を下達に来た なまはげに扮した隊員の声であった。

突如として訓練非常呼集を命ぜられた佐々木幹候は、速やかに準備をして隊舎前に向う。そこに待ち受けていたのは、木村2曹を初めとしたレンジャー助教たちである。息つく暇も無く装備と準備体操を済ますと、櫓を飛ばす助教たちの先導を受け、駐屯地内を喚声とともに駆け巡った。期せずして始まった訓練ではあったが、佐々木幹候は弱音を吐くことなく見事完走した。

その後体育館で待ち受けていたのは、着隊を歓迎する連隊の姿であった。そして歓迎の垂れ幕を携えた隊員の向こうには、昨年末、連隊銃剣道競技会を制したばかりの第3中隊による選抜チームが最後の壁となり待ち構えていた。佐々木幹候は13人の猛者に全身全霊で初一本を繰り出し、一突きするたびに歓声と拍手が巻き起こった。最後に第3中隊長石井1尉との一騎打ちを制すると、中隊長より歓迎の言葉が送られ、全隊員が拍手で、歓迎の意を示した。

着隊申告における挨拶では「（幹部候補生と言えど）まだまだ自衛官になったばかりなので、皆さんから多くのことを学びたい」と、新しく絆を育んだ仲間達に思いを投げかけ、熱気覚めやらめまめに締め括った。





第8次野営（積雪地訓練）



雪を制す

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、1月24日～31日までの間、岩手山演習場において第8次野営（積雪地訓練）を実施した。

本野営では、スキー行進能力の向上を図るとともに中隊練成訓練を実施して基礎となる部隊及び各種射撃の練度向上を図った。

連隊練成訓練は28日に30kmスキー行進を実施。情報小隊を先頭に出発したが、吹雪で視界不良の厳しい気象条件での行進であった。4人一組での約100キロの重さのアキオ曳航（アキオとはフィンランド語でソリの意味）では、足の運びを合わせ、坂を一步一步力強く登っていた。同日22時に連隊は行進を終えた。

射撃では70式地雷原爆破装置、01ATM、81M迫撃砲、120M迫撃砲、狙撃銃、小銃、戦闘射撃の7項目を行った。

81M迫撃砲の射撃では饗庭野（あいばの）演習場での事故発生以来、東北方面隊の81M迫撃砲を保有している部隊において初の射撃であり、射撃諸元・装薬を分隊長と安全係がダブルチェックを行う等万全の態勢で射撃を行なった。また、70式地雷原爆破装置の射撃においてアンカーを刺そうとするも、凍土のためなかなか刺さらず四苦八苦したが、小隊が力を合わせ必要な深さまで刺していた。

今年の冬は例年に比べ雪が少ない中、隊区内の積雪地を活用して訓練するとともに、今回の演習により連隊は冬季間の行動への対応能力をより高めた。





連隊冬季戦技競技会



雪原を溶かす熱気

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、2月14日から15日までの間、森岳温泉36ゴルフ場において平成30年度連隊冬季戦技競技会を実施した。

連日氷点下を記録する中、二日間かけて行われた本競技会は、隊員達の寒気を吹き飛ばすほどの熱気で競技会場を埋め尽くしていた。

14日は個人戦が行われ、10kgの重りを背負った選手達が、登り下りや平地等それぞれが得意な地形に至ると、少しでも前に出ようと足を進めた。

15日は個人戦及び団体戦（アキオ曳航）が行われた。団体戦は個人の重りをアキオ（ボート型の曳きソリ）に乗せ、4人一組が一丸となり声と足を揃えて曳航した。登坂時の重さもさることながら、下りの際、4番目の隊員が巧みなストック捌きでアキオのスピードをコントロールし、組のスピードを落とすことなく進む様子は圧巻であった。

二日に及んだ競技会は各階級各種目において、高いアベレージを記録した第2中隊が熱戦を制した。個人賞は階級毎の1位が表彰されたが、その中でも陸士の部1位に輝いた重迫撃砲中隊 木村大希士長は32分04秒という記録で全階級を通して最速であった。木村士長が山間から最速で姿を見せると、ゴール付近で見守る応援者や統裁要員は一様に腕時計を確認し、その速度に感嘆の声を上げた。

表彰式において統裁官の荒巻1佐は「（皆全力をもって）走破できたことを嬉しく思う。これからもコース研究等を習慣づけ来年度においても活躍を期待する」と来年度の師団冬季戦技競技会への激励も兼ねて選手達に訓示を述べた。





秋田県・羽後町冬期防災訓練



一人でも多くの要救助者を救うために

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、2月17日、秋田県羽後町で実施された秋田県主催の平成31年度秋田県・羽後町冬期防災訓練に参加した。

連隊は、第3中隊長石井要1等陸尉を訓練部隊の長とした約25名が訓練に参加した。本訓練では、秋田仙北及び北方秋田仙北震源連動地震を想定して災害対策本部運営、シェイクアウト、道路啓開、孤立集落対策・救援及び雪崩遭難者捜索・救助等の訓練が実施され、秋田県、関係部外機関等との協同連携の強化及び災害対処能力の向上を図った。

災害対策本部運営訓練では、連隊本部第3科皆川晃太郎1等陸尉が連絡幹部として災害対策本部に入り、羽後町役場、国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所、秋田県雄勝地域振興局、秋田県警察本部、湯沢雄勝広域市町村圏組合消防本部及び気象庁秋田地方気象台との連絡調整を実施した。

その後、シェイクアウト訓練に引き続き、道路啓開訓練では、積雪により立ち往生した車両への対応要領及び放置車両の移動等を含む道路啓開訓練を1コ分隊基幹の訓練部隊及び羽後町建設業協会の重機が連携して除雪を実施した。

また、孤立集落対策・救援訓練では、集落長からの雪害の情報提供及び羽後町から県知事を通じた災害派遣要請を受けたという想定で、軽雪上車（スノーモービル）による状況確認後、大型雪上車により救援物資等の搬送を実施した。

さらに、雪崩遭難者捜索・救助訓練で、スキー場における利用者の雪崩遭難事故を想定し、現地合同調整所を設置。消防本部の指揮の下、捜索・救助要領について調整され、訓練部隊は警察、消防及びDMATと連携して雪崩現場での捜索・救助にあたった。この際、災害救助犬による捜索が実施され、要救助者を迅速に発見することができた。

本訓練に分隊長として参加した第3中隊長木村寛正2等陸曹は、「実際に起こり得る災害を想定しているため、非常に内容のある充実した訓練となった。本訓練で得た教訓を普及して、災害発生時の迅速な対応により一人でも多くの要救助者を救助できるように尽力したい。」と話した。





秋田駐屯地桜植樹



未来のサクラ

秋田駐屯地（駐屯地司令 荒巻1佐）は、平成31年3月25日、秋田駐屯地において、秋田県防衛協会の協力により、桜苗木の植樹を実施した。

小雨降りしきる中、各部隊による植樹に先立ち、桜苗木の植樹セレモニーが行われた。その中で荒巻駐屯地司令は「昨年引き続き、秋田県防衛協会の皆様に桜の苗木をご支援頂いた。未来の仲間に残すためにも心を込めて植樹してほしい」と本行事を祝うとともに、隊員に訓示した。また、中泉防衛協会会長は、本日の天候（雨）は木が根を張るには最適な植樹環境である事を話され「平成最後の記念すべき植樹として、思い出に残してほしい」とご祝辞を述べられた。その後、秋田駐屯地司令、中泉防衛協会会長、鈴木事務局長、業務隊長による記念植樹が実施された。

セレモニーに引き続き、各部隊は駐屯地各地に植樹を始めた。昨年参加した隊員、初めて参加する隊員、それぞれが植え方を教授し合いながら思い出と共に桜を植えた。

隊員は、未来の満開の桜と将来の後輩たちを思い描きながら、終始笑顔で作業に取り組み、桜苗木の植樹を終了した。

